わたしと原爆

北　シズエ

私は十六歳でした。空襲対策の建物疎開で、母と私は広島の雑魚場町から金屋町に移り住んでいた。二階には、日赤の看護婦さん三人に住んでもらった。裏の離れに母子三人家族も住み、女ばかり八人で仲良く生活していた。私は夜、タイプを習いながら日本郵便逓送会社へ務めていた。

六日朝、私はなぜか、家から出たくない気がして、母に「休みたい」と言ってしかられた。やはり行きたくない、と思い、わざとぐずついた。というのも前夜の空襲で眠れなかったので、看護婦さんと楽しくお話をして、夜を明かしたのだ。私は再び母にしかられ、朝食抜きで家を出た。

二、三軒ほど行って「やはり家へ帰ろう」と体の向きを変えた途端、左側からピカッと青白い光を受けた。

目の前が真っ暗になり、防火水槽のそばにうずくまっていたら、顔の左半分がヒリヒリ痛み出した。そっと手を当てても痛いだけ。

わが家へ飛び込むと、表の間の畳が次の間に重なり、押入れも何もかも部屋の中はメチャメチャ。中庭にいた母は二階のガラスを背中一面に受け傷だらけ。表に出ると赤ちゃんを背に、足首のちぎれた姑（しゅうとめ）さんを引きずるようにして女の人が走って行くのが見えた。

私たちも着れるだけ服を身につけ、持てるだけの品物を手にして逃げた。日光に当たるとやけどが痛むので、シーツをかぶって歩いた。途中、何も身につけていない娘さんが私に近づいて道を聞かれ、驚いた。上半身、やけどで肩の皮が手の指先の爪にひっかかり、薄い布切れを持っているように見えた。痛みに体をぶるぶる震わせ、肌は美しいピンク色だった。

あれから四十七年。幸い、私は二十歳で結婚し、子どもには縁がなかったものの、やけどのあとも、割にきれいに治った。白血病などいろいろ被爆の不安はいつもあるが、亡くなった人たちのことを考えると、幸